「政美日誌1919」No.７

──１９１９年１１月１日～１９１９年１１月３０日──

小池政美

 悦につけ愁につけ静かに御前にひれ伏す時

 彼も彼所に御恩恵深く祈りつつ

 大いなる日を待ち給えるを讃めしめ給え

 1919（第7巻）11.1～30

＊

１９１９年１１月４日（火）夜。

事多き秋なる哉。

御心の事事に着々と行われ行く秋なる哉。

御恵の深く深く人間の心の奥底に染み行く秋なる哉。

特別に僕の小なる心を慰め給い

教え給え、悦ばせ給え、涙は心を洗わせ給う秋なる哉。

聖なる秋の夕。御名を畏るる清き乙女。

只感謝を続け奉らんのみ。

願わくば、おそらくは本年最後の巻ともなる可きこの巻をして

初めより終りまで謙遜なる心をもって讃美の声をあげしめ給え。

雄々しくも世と戦いつつ十字架を負い行くを得しめ給え。

弱き意思を温かき心と特別に潔き精霊とに満たされて

ありし事をありのままに感謝せしめ給え。

尊き御名に於てこの感謝と祈とを御前に捧げまつる。アーメン。

＊

# １９１９年（大正８年）〔２４歳〕

１９１９年１１月１日（土）

お昼とほとんど同時に仕事をやめて──調査月報は終に今日も出しきれなかった──食事をおわると直ぐに中渋谷に行く。敦さんは日土で留守。磯雄さん静枝さん勇さんは鎌倉へ昨日から泊まりがけで出掛け、おば様と嘉代ちゃんと丈で僕を待って下さった。

色々の事を伺ったりお話したりした。正ちゃんの事も出た。お美喜さんの事も出た。君代さん方の事を伺った。６時すぎまで５時間近くの間、静かなお話が温かい心と心との間を幾度と無く往来した。嘉代ちゃんが僕の大学を出たのを祝して作って下さった写真立と、今作りつつあるクッションとを下さるとおば様はおっしゃる。嘉代ちゃんにお礼を云って僕にお祝を上げさせて下さいと願う。若しお約束が無ければ聖書を──特に英語のをとお約束する。おば様に特別にお話をすると、おば様はお祝には注文がある、どうぞ聖書を特別に英語のを、おば様御自身３０年余の前から読んで居る英語のが善親しいと云われる。僕と嘉代ちゃんの相談と全然一致して居るのも有難い。只一つ異うのは僕は名を書かずにさし上げたいと思ったが、おば様は名の外に何か書いてとのことであった。よき辞を教えらるるのを待つつもりである。

６時半又お目にかかる可き折のあるのを思いつつお辞れする。嘉代ちゃんは外套をかけて下さった。激しい雨の中を東中野に急ぐ。

今日は佐伯さんも見えた。僕の今日の午後の事をしきりと心配して呉れた。様子を聞いて悦んで呉れた。聖書の事を話し、どうぞ佐伯さんとお美喜さんとが僕に贈らんという聖書を僕が嘉代ちゃんに贈るのと同じのにして下さいと頼んだ。雨の中を静かに帰る。実に僕にとっては幸な土曜日であった。藤井先生に徴兵の事をお話しする。

藤井先生、書第８章（第４）　但し記第２章。

……〔講義内容の要旨、省略〕……

１９１９年１１月２日（日）

お湯に入って好き日曜の午前をすごす。武田のおば様が若し見えたら御一緒に大手町へと心待ちにお待ちして居たが終にいらっしゃらなかった。母様と御一緒に大手町へ行く。

藤井先生「末世観の確実」

内村先生「十誡第７条」

お話を伺って居らっしゃる間の母様の態度が苦になってならない。小なる信仰の結果かも知れない。小野先生にかけた悲を又ここに繰り返さないのかも知れない。否々基督の悲を少しは味わえとすすめ給いし御恩恵かも知れない。何れよせよ、苦き苦き盃である。御心ならば是をも呑ましめ給えである。

高島さんのおば様と嘉代ちゃんとにお目にかかった。母様はおば様は神田さんのおば様と同じく人を下に見なさる癖だといわれる。嘉代子さんはいい方だといわれる。人をほめたりけなしたりする権能は母様には無い。Vengeance is mein!〔復讐するは我にあり〕とは誰のお辞であるか。

西片町へ伺う。おば様の御病気御見舞にである。大変よろしいという事であった。谷田部太郎氏の川崎造船所に於ける職工との生活状態を聞いたり、正ちゃんの煙草を呑むのを見て驚いたり、僕としてはあらずもがなの訪問であった。是から出来ることなら余り伺わぬ事である。早く佐伯さんが家を持つ事、東京の郊外に持つ事、及そしたら日曜の夜毎僕は訪問する事等話しながら帰る。僕は佐伯さんのためにとお美喜さんのためにも早く其の日が来ればよいにと思う。二人のために云えば二人を僕が兵営に行くまでに呼ぶ事は色々の周囲の事情を考えてやめと決定した。

日記が大変貯ったので忙わしく筆を動かしつつ日曜の静かな夜を更かした。

……〔藤井先生と内村先生の講義の要旨省略〕……

１９１９年１１月３日（月）

１７日の朝である。丁度２週間おくれてしまった。急がねばならない。

西村を東京駅に送り、急いで教文館に行く。よき聖書ありやと思ってである。しかし玆によきものはなかった。僕はMyersのSt.Paulを求めて丸善へ帰る。丸善に非常によいのがあった。是は字は少しこまかいけれども本当に好ましい出来であった。嘉代ちゃんの気に入る事を願って求めた。帰って見ると谷口が僕を待って居た。一緒に歩こうという。小一時間歩んだ。彼はしきりに頭脳の破産を語って居た。僕の兵営行を一般人通りの観方から見て居た。大変だねといった。僕の仕事を面白いかと聞いた。彼の仕事はおもしろくないと云った。僕、僕の信仰を語らざるを得なくなった。１５年計画の話もした。調査、調査という声が如何に誘惑的なるかを語った。しかし僕の歩む可き路の只一つなるを説いた。又、Office firstは僕の信仰でない所以を語った。谷口は驚いて居た。高等学校時代から見て大変異って来たねと云った。そういうのは失敬だけれども本当によき見方だねと云った。

午後４時、十拳君に電話をかける。急に会いたくなってである。今晩にしようじゃないかとの事で、其のまま東京駅に行き落ち合って中野へ行く。御飯を頂いて正ちゃんの煙草の事だの何か出て来た。が一番真面目に話したのは嘉代ちゃんの事であった。しかしそれも嘉代ちゃんの事としては極く少しであって、僕等の結婚問題としてであった。多くの不真面目な結婚が世に行われて居るのを嘆じた。僕はしかし佐伯さんの事を思わざるを得なかった。名は出す事をさけたが、一人の男が是がために実に苦しんでしかも美事に其の難関を切り抜けた事を語った。それを見て僕は心安んずると云った。

彼はそれは誰の事だか聞きたいといった。僕はそれは語るまいと云った。それから君はフリーかと聞かれたら、どう返事するかと聞いたから、彼自身彼のこの問題に対する態度を明にした。正直に彼はいう。３０分程、こんな人を妻君にもらいたいと思う人がある。しかし直にそれは忘れてしまう。僕には多くの癖がある。その癖をよく知って、そっちへ僕のエナージーのむき行くを防いで呉れる人がほしいと云って居た。本当を語ったとは思えなかった。又は若しそれが本当だとすれば未だ未だ十拳君は行く所まで行き切って居ない事を思わざるを得なかった。僕はどうだというから、僕又真面目にありのままを答えざるを得なかった。僕は誰とも約束をした事はないという点より見て自由であるけれども、かくの如き人が欲しいと思う其の人は決して抽象的ではない。現実の人である。この事に於て自由でないと語った。

８時半頃中野を出て東中野まで歩いた。よき星の夜であった。１８世紀に於けるVoltaire〔ヴォルテール〕とRousseau〔ジャン＝ジャック・ルソー〕との神に対する地位を聞いた。只帰せんと無理につとめた時に、人の心の自由をとり返せし人それがVoltaireであった。その無神論に深い敬虔の念があった。是を丁度逆に極端に光らせて之の型に於て敬虔たらしめんとしたのがRousseau であった。Historieal proportionに注意する人はこの二人の地位の相違と立場とに全然の注意と尊敬とを払わねばならないのである。

１９１９年１１月４日（火）

馬屋隼氏に電話をかけて一昨日東京を去った事を聞く。麻布の帰りに鷹匠町へ寄って本とサブ・ノートとを受取って帰る。小さな一つの仕事が多忙中の人に役立たんとして嬉しい事である。聖書の事を佐伯さんに頼む。

１９１９年１１月５日（水）

〔記載なし〕

１９１９年１１月６日（木）

麻布を出たのが７時半。実によい日である。高島さんがお尋ねしたくなった。行って見るともう□〔ベランダ？〕はしまって居る。お月見を予想して来た丈に少々がっかりしたけれども、森を廻って居る間に元気快復して其れでもとお玄関に寄って見る。戸をあけて下さった嘉代ちゃんのびっくりさ加減。驚かれたのは嘉代ちゃん丈ではない。おば様御自身余程驚かれた様である。何となくおかしく又面白く、一時間半程をお話し、よき月を眺めつつ帰る。

出家と其の弟子とを読みきった。又、原稿校正を二、三した。寝たのは３時であった。

出家と其の弟子とはよき事二、三を教えて呉れた。一は我を罰し給え、うく可きつみをうけしめ給えとは未だ未だ身の悪業の深さを知らざるを示すという事である。一つは無は他の多くの事同様人間をすがめにするが、ここに特別に注意せねばならない事は、無は時に神様御自身を排斥する事さえある事であるという親鸞の辞であった。劇そのものは最後が余り感傷的になって居るせいか、二度読もうとは思わないけれども、仲々よく出来ていた。併し未だ未だこの人の信仰は初歩にあるのだと思った。聖書の辞を唯ひいたというにとどまる如くである。

１９１９年１１月７日（金）

嘉代ちゃんに手紙を書いて居る。何を書いたか忘れたが、昨夜のお礼であるのであろう。

朝、曙町が見える。４日の手紙に対する返事にである。夕方の散歩を約する。夕方、渋谷であったのは５時少しすぎ。も早くらかった。月は昨日程よくない。白い雲が空一面に広がって居た。それを透してもれ来る光も夜明の感を以て四六時中、僕等二人を支配した。

渋谷から代々木へ、代々木から堤へ、堤から堀内、中野へ。堤から堀内へ出る路を又間違えた。あそこは余程間違い易いと見える。

代々木では二人で一生懸命、正ちゃんの事を心配した。ひょっとしたら、多分明夕、正ちゃんがおば様をお訪ねすると伺った。昨夜特別にお願すればよかったと思う。これからお願に行こうかとも思う。しかしおば様の事だからきっと好くして下さる事と安心して、行くのは見あわせた。煙草を呑む事様々の小事かも知れない。しかし其の根本に於て大事である。十拳君は何となく悪い事が行われ初めたというような気がすると云った。本当にその通りである。佐伯さんは事は人一人一人と思って居たが慶応は駄目ねと思いきってしまう。本当にある時には一人が実にも尊く力であるのに、ある時には一人の力は全然無い事もあるが故におそろしい。

堤を歩いて僕等の心は感謝に満ちて居た。たった六月の間に変われば変わるもの。一生懸命に御名をたたえる。

９時の祈をも堤の上であった。大根の畑が美しくなった。麦がもう穂を出して来た。中野に着いた時にはやや疲れて居た。

１９１９年１１月８日（土）

仕事は昼に終らなかった。そのために西大久保についたのは３時を少し廻っていた。お二人ともお留守であった。明日が母様のお誕生日である。しかし今夜になさった。皆々様来て下さった。僕はお祝を頂くとそのまま東中野へ失礼した。

ローマ書８章２３節～２７節。……〔英語のメモ省略〕……

１９１９年１１月９日（日）

大手町へ行く電車の中でひょっこり佐伯さん達に会う。ペンを一昨日の散歩の時、落とした相である。お祈にうつむいた時すべったのを知って居たけれども、お出とすくっと立ったので拾うのを忘れたのだ相である。昨朝早く行ったが、なかった。小学校の生徒がたくさん通っていた。小学校の生徒なら誰が使って呉れてもよろしいという。小学校の生徒なら拾って届けて呉れるだろうにと思う。

畔上さん「コロサイ書の基督観」

先生「十誡第７条」

母様は初めの先生のお話がよく判るといわれた。判って頂きたかったのはこの前のお話であった。乍併、是日のが判って下さって尊く又有難い。是によって何時かは僕の世の中に対する立場がすっかりお判りになる事もあるかも知れない。

嘉代ちゃんが予告通り、日本髪にゆって来られた。十五六のお嬢さんになってしまわれた。

本郷へ歩み、大学の池に出た石の卓子にすわった。佐伯さんとお美喜さんとから聖書を頂く。お祈を以て是をうけた。多くの事が不思議に御恩恵の中に行われます。感謝にたえませぬと同時に一人の友人が僕のために持って呉れる信頼を有難しと思います。時々はお祈り下さるのである。どうぞ、彼等の信仰のそむかざらしめ給え。

楓の並木をぬけて椎の木で別れる。急いで家に帰る。例の聖書である。タイトル・ページに、

政美様

　　　みふみを読みてお祈りになる時には

　　　私共のためにも感謝をささげて下さいませ。

　　１９１９秋　　　　　　　　　　誠一、喜美子

と書いて下さった。すなわち二人の心をそのままに表わしている。

この夕、何とはなしに非常に淋しさが僕の心に来た。何所から来たとも判らない。何の故とも知れない。静かに温めて待つ外無い。特にお夕飯に伺って、この中に僕の心を知るもの一人も無しと思うた時に淋しさは絶頂に達せんとした。９時を待って下さる方には申訳無いと思った。乍併７時に心からのお祈をして休ませて頂いた。

畔上さん。内村先生。……〔講義要旨の英文メモ省略〕……

１９１９年１１月１０日（月）

起きたのは１時である。朝の祈をしてペンをとる。一つは嘉代ちゃんにあててである。一つは佐伯さんとお美喜さんとにあててである。

嘉代ちゃんに書く。聖書を頂いた。母もやや判って呉れた。しかも非常に淋しくなって来ました。なすべき事をなさず、なすべからざる事をなせりというあの懺悔が非常な暗示を以て来ますと書いた。訳が判るまで何日かかるか、何月かかるか、何年かかるか知れませんが、判るまでは動きますまいと書いた。じっくり待っていますから、其のおりまで安心していらして下さいと書いた。

おば様が桑原さんに手紙を書かせるというお話を伺って本当に嬉しいと書いた。僕がえらかったら、とんで行ってお願する所であると書いた。お礼を心から申し上げねばならぬ所であると書いた。ずい分雨の降る中を御厄介でしょうが、鎌倉まで行ってお頂きなさいましと書いた。正ちゃんの事を頼み、清き最後の十日を心より願うと書いた。

佐伯さん達に書く。又六日の彼の夕を想い出さざるを得ない。どうぞしっかり歩いて行って下さい。Psalm of Life〔「人生の歌」アメリカの作家ヘンリー・ワズワース・ロングフェローの詩〕の最後の句、

Lives of great men all remind us 偉人のを想ひては

　We can make our lives sublime, 　われらが生を崇高になし、
And, departing, leave behind us に臨みて我らも
　Footprints on the sands of time;— 　時の砂漠に足跡をとどめばや。

Footprints, that perhaps another, 足跡、そはおそらくの、

　Sailing o’er life’s solemn main, 　人の世の厳かなる海原を漕ぎゆきし人の。
A forlorn and shipwrecked brother, これを見て寄るべなき難破の者は
　Seeing, shall take heart again. 　再び勇み振ひつらん。

Let us, then, be up and doing, いざ我ら起ちてさむ、　With a heart for any fate; 　万難に耐ふる心根をもて
Still achieving, still pursuing, 達しては愈々め、　Learn to labour and to wait. 　働くを学び、待つを学ばん。

 　　　〔小池辰雄訳　著作集第八巻『詩歌集』〕

どうぞ、しっかり歩いて行って下さいと祈る。

佐伯さんはLife of Thomas Arnoldでよろしいとして、お美喜さんに何かあげたい。午後麻布へ行く時に書類会社へ寄って見る。本の高いのにやや驚かされた。Imitation of Christ〔キリストに倣いて〕と定めた。

麻布より帰って川原君に会う。高文のお話をして本とサブとを貸した。若い若い、未だ未だ考えねばならぬ人と思わせられた。

それから急いで西大久保へ行く。町の役所の件。もう僕の範囲とは思われないので、ほって置いた。殊に「訴訟の事など夢にも思いも出せません」と母様に云われた。おじ様のお辞は僕にこの態度をとらせた。所がおば様は正反対なので早くお目にかかりたいと願ったのである。西大久保へ行って見れば、何でもないようである。おじ様の法律論を通る。

今日、近衛歩兵第三聯隊主計生ときまった由を中名生さんからお知らせ下さった。本郷の区役所から毎日午後７時から一週間予備教育をするから来いと云って来た。前の知らせはありがたい。後の知らせはけとばす事にした。理由は曰く、公務多忙。

龍ちゃんと粟屋とに書く。

１９１９年１１月１１日（火）

朝、嘉代ちゃんに電話をかける。近歩三、主計を知らせるためにである。おば様に何日鎌倉へいらっしゃいますかと伺う。来週の日曜との事である。祈って居りますという。それから散歩はいつと伺う。其の後との事であった。

お美喜さんにImitation of ChristにそえてDaily Strengthがさし上げたくなった。４時用事をすませて丸善に行く。ひょっこり高島さんのおば様がペンをとっていらっしゃるのに出くわした。嬉しい事は嬉しかったが本当に面喰らってしまった。丸善に無く教文館へ行く。御挨拶をして出ようとすると、おば様にあなたにお祝にとペンをとりに来たのです。どうぞおとりになるのはひかえて下さいとの事であった。

帰りに西片町へお知らせに伺う。おじ様は金の事に就いて色々と御心配下さった。有難い御親切である。十拳君、佐伯さん、粟屋に徴兵の事を知らせる。

１９１９年１１月１２日（水）

夜帰ると高島さんのおば様と嘉代ちゃんとからお手紙が来て居る。散歩は明日にしようじゃないかとの事である。場所はやはり僕に定めよと仰しゃる。発意はおば様とはこの間の電話で知った。おば様に発意せしめしもの嘉代ちゃんなる事うたがいなし。

おば様のお手紙にはもう一つあった。過去に於て様子を知らせる事を僕が余りひかえたのを口惜しいと思うといわれる。これからは時々書くように、それでペンを与えて下さったのである。胸が痛む。

三十日の心より僕の心は遙かに強くなった。踏む可き道を確信する事が出来るようになった。すぐ電話をかけた。明日１２時半頃、代々木でお目にかかりますとお約束をする。

１９１９年１１月１３日（木）

曇って居る。９時半に電話をかけて嘉代ちゃんと出掛ける事を相談する。残れる一週間の一日たりも美しくする事を得しめ給わば、其のために僕を使い給わば、是に越したる悦はない。

お昼、愈々出掛けようとすると、霧が降って居るに気がつく。おやと思わぬではなかったが、ままよと行く。幕惣で葡萄のおいしい所をえらんで貰い代々木へ行くと嘉代ちゃんは来て居られた。おば様も橋の彼方に居られたが変な事には河波さんの奥さんが居られる。嘉代ちゃんに丈行って貰って僕はプラット・フォームを出る。暫く待つとおば様方もいらしった。新宿まで歩いて井ノ頭に向かう。

井ノ頭までの道は例によって実に美しくあった。井ノ頭も秋の色々がやや下に見えたが梢はみんな青かった。不思議に春を思わざるを得なかった。森の奥の奥、水の畔に座しつつ葡萄を食べながらお話をする。

誰か僕は連れがある様に思えたので折角のお弁当を持って来ず惜しい事をしたと仰しゃる。大笑である。何時とはなしに話は真面目になる。

何時から僕が聖書を読むようになったかどうしてかと仰しゃる。一昨年の暮どうにもこうにも動きがとれなくなりましたとしか申上げられなかった。

何とも判らず非常に淋しくありますと申し上げたのに対しては、「強くなって頂戴」と励まして下さった。そうそう、僕が聖書を読むようになろうとは夢にも思わなかったといわれた。正ちゃんに対し所々にくぎを打って下さった事をお話し下さった。

おば様をおいてきぼりにして──標示を読んでいらした──ピンをおとしたと仰しゃって捜もした──僕と嘉代ちゃんと二人きりで歩いた。どうも悪いことをしました。なす可き事なす可からざる事を取り違えて参りました。どうぞゆるして下さいと申上げる。おば様も強くなれと仰しゃいます。神様がいられなければトラピストは非常な誘惑ですという。しかし神様がいらっしゃる以上、おそらく強くなれるであろうと思います。強くして下さると思いますから僕には心配なくあなたの道をしっかり歩いて下さい。あなたの前途決して世の中が無責任に云う程簡単とは思いませんが、しかし常に神があなたのためにあの時のままの心で祈って居られるのをお忘れにならないで下さい、と願う。

二人でひざまづいてお祈をする。おば様はよき友たる事を誓えとおすすめになって下さいます。誓いの弱きを知ります。お祈を致します。よし不信仰時代の僕に対して、この友情が許されたと致しましても、今は共に信仰の生活に入りました。どうぞ何時までもこの友情をはぐくみ給え。どうぞ御心ならば何時までも何時までも聖ならしめ給え。只御名によってのみと願ぎまつる。祈り終って心は清らかである。嘉代ちゃんの優しいおとなしい乙女らしい聖なる祈を聞く事が出来て本当に力であった。有難かった。

お美喜さん方の話が出た。

明日聖書に書く可き辞について相談した。今の所は、

悦につて愁につけ御名を讃うる時

彼も彼所に御心を痛めて祈りつつ

彼の日を待ち給えるを感謝致しましょう。

ときめた。若し桑原さんの感情を少しでも害するならば、僕はお名を書きませんといった。しかしそれは嘉代ちゃんの望で嘉代子様と書く事とした。

名といえば手紙の宛名は僕が勝ったようで実は負けたるを白状した。それから、正ちゃんの云った事、即ち何か一つ嘉代ちゃんの胸にわだかまって居るもののある事を今日は伺いたいと思った。乍併、一言も嘉代ちゃんは云いたくなく様であるから僕はすぐ辞を継いで、人には一人の胸に秘めておくが故にこの上もなく尊いあるものがある。それならそれも其の中に秘めて置いて下さいとお願いする。

二人で紅葉の葉をつんだ。僕のつんだのは二枚、同じ小枝から出て居たのであった。それをわけた。嘉代ちゃんは小さい紅葉を二枚つんだ。それを二人でわけた。何となく片瀬の昔に帰った様な気がする。

夕方も近づいたので、おば様のお誘い下さるままに神田川へ行く。一寸嘉代ちゃんの立った後におば様が、嘉代はトラピストにして下さいと申しました事がございます。それはいけませんと申しましたら、其の後は何事ももう神様にお願致しましたから御安心下さいましと申して何にも話しません、と仰しゃる。「若し神様がいらっしゃらなかったらトラピストは僕には強い誘惑です」と云った昼間の辞が非常な勢いでおしよせて来る。明日３０分程お話を一人でさせて下さいましとお願いする。

クロスを仰ぎつつ万世橋でおわかれし、本郷で髪を刈って帰る。９時のお祈は頭を刈っている最中。お祈をして居る中にねむくなった。

１９１９年１１月１４日（金）

３時半頃、大手町を出て中渋谷に行く。おひるに際してもらった昨日おば様から頂いたペンと「研究十年」「所感十年」「宗教と現世」とを持ってである。

手と顔とを洗わせて頂いて、お祈をして相談をして、聖書の白紙に例のペンに第一の役をつとめて貰った。

嘉代子様

　悦につけ愁につけ神に御前にひれ伏す時

　彼も彼所に御恩恵深く祈りつつ

　大いなる日を待ち給えるを讃めしめ給え。

　　　１９１９年秋　　　　　　　　政美

□〔ベランダ？〕に出て大空を仰いで多くの心におこれる思をこめて嘉代ちゃんに、どうぞ長い間おつかい下さいましとお渡する。それから今日は一つ伺いたい事がありますと申すと、嘉代ちゃんも昨日はどうしても云えなかったが今日は僕にいいたい事があるといわれた。

静枝さんがお浚とかで勇さんが御飯を待ったためおば様とお待ちになる。敦さんは敦さんで高商の英語会へ行かれたので結局、嘉代ちゃんと磯雄さんと三人で頂く。トルストイの事など話しながら御飯もおいしく頂いた。

嘉代ちゃんと二人になった時、祈の後で伺ったのはこんな事であった。静かに生を楽しんで居る僕を嘉代ちゃんの事のために乱して誠に申訳無いというのであった。僕いう、決してそうではありません。高等学校の時代から聖書にとらわれるまで３、４年の間に僕の多くの友人は荒んで行った時に僕をひきとめて下さったのはあなた御自身御存知かどうか知らないけれども其れはあなただったのです。それから昨日おば様が、僕がどうして祈るようになったかとお聞きになった時に、ヘルプレスになりましたと申しました。一方本当に祈って下さる方のあったのを信じない訳には参りません。其の一人は唯にあなたであったのを信じます。有難うございましたとは僕の申し上ぐ可き事で、あなたの申す可き事ではありません。それから伺う。あなたはトラピストに行きたいといわれた事がある相ですが、僕は昨日うっかり「神様が居られなければトラピストも僕には強い誘惑です」と申しましたのを忘れる事は出来ません。今でも併しあなたはそうですかというと、そうだといわれる。

僕はトラピストにどうしても無理のある所を説いた。僕自身のトラピストへ行きたいという気持には神様にすねて居る所がどう考えてもある事を見逃す事は出来ませんと申した。セント・ポウロをひく。

……〔英文省略〕……。

僕の信仰があなたの信仰と今直ぐなるかならぬかは問題にしますまい。唯よく申上げた事丈は覚えて下さい。そして若し尚最後にまでトラピストを正当とし是を人の行く可き唯一の道とせられて引かれんとする時には、どうぞ一言僕に相談して下さる事をお約束くださいと願う。尊いお約束は出来た。

あとはお祈である。お祈がすむと嘉代ちゃんは、小さい銀のクロスを長く胸につけて居りました。少し汚れましたがどうぞ長くといって下さった。有難く頂く。

おば様と三人で色々お話をした。どんなに嘉代ちゃんの周囲に愚な人間が多いかを伺った。段々のお手紙の内容が判って来た。

それから若し信仰に関するお返事が来なかったら、どう致しましょうという大切な問をかけられた。僕はいう、あなたは桑原さんを信じられましょう。そうすればお返事は来ます。誤魔化すつもりではないのでしょうかとの第二の問に答えては、是非お母様に行ってお頂きなさいましと申す外なかった。

９時半、車で送られ肩掛けにつつまれてあたたかくお辞をする。

歩む可き覚悟を母様にお話した。

１９１９年１１月１５日（土）

役所から原宿に。おば様にお礼を。原宿から家に。夜、東中野に、東中野から西大久保に。藤井先生、ローマ書８章２８節～３０節。

……〔英文の講義要旨メモ省略〕……。

佐伯さんと新大久保で別れる。祈って呉れる事をくれぐれも頼んだ。

武田のおば様は僕を待って下さった。９時半から１２時まで諄々と語るを熱心に聞いて下さった。聞き終って仰しゃった事は「おばさんが悪かった。政さん、御免なさいね」であった。初めて嘉代ちゃんに会われた時、僕のために嘉代ちゃんがほしく思われた相である。一両度お話をしたが修行中の事ではあり、其の機会の与えられざりしを申訳けなく思うと仰しゃる。僕申上げる。

神様がお与え下さるものならば下さるはずです。僕今の所何の予期をもたずに二、三日を暮らします。若し下さらなくば、僕は一生家を持つ事は許されますまい。愛の罪悪になり易きは其の神をもう□ら□事のあり得ぬかによると申します。トラピストも誘惑します。しかし僕の一生は外面的には極めて平凡でありましょう。内面的には偉大なものであってほしいのです。心のかわききる事なく強くなれよと云ってくださった。おば様と嘉代ちゃんの贈ってくださったものとに慰められて雄々しくも温かくも暮らして行きたくありますと申上げる。おば様は涙を流して聞いていらっしゃった。祈って休んだ。

１９１９年１１月１６日（日）

おば様から１０円拝借した。大久保の座敷に頑張って嘉代ちゃんに書く。

５月２５日のトラピスト観をひいた。

 “Life is real, Life is earnest!”〔はなり、はなり！〕

「神を愛する者、すなはち御旨によりて召されたる者の爲には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。」(ロマ8･28)

高島さんからお手紙がとの事に帰って見た。桑原さんからのお手紙が入って居る。

仰しゃる事はよく判るとある。母の嘉代子さんを待つことは公知の事実であるとある。私にもまさかの時の覚悟があるとある。遺言にも書いておく。兄弟の了解も得てある。只今それを書くのはお互の感情のためにまずい。書かぬが信じて呉れとある。

こんなに一生懸命になって居る事をかくも簡単にとりあつかってしまう人の心を浅しと見る。

大手町の帰りに大学をぬけて大きい石の上に立って、Life of Amoll（「御恩恵と御心が深くも顕われし夏は秋なりし我」と書いた）を佐伯さんにImitation of Christ（「御心のままに優しくも雄々しく歩ましめ給え」と書いた）とDaily Strengthとをお美喜さんに贈る。

佐伯さんの祈につれて祈る。

お父様、若しあなたのお導きと彼のお祈となくば、私には歩き得ぬ大きい荷が今双肩にかかるを覚えます。どうぞ雄々しくも歩ましめ給え。私一人の悲と苦しみとはきっとあなたが堪えさせて下さる事を信じます。乍併、幼き者が迫害さるるのを見ては苦しくてたまりません。どうぞ是を助くるに大胆ならしめ給え。この誤解と悪評とをおそるる事無く歩ましめ給え。と同時にその大胆に名を借りて私心を遂ぐる事勿らしめ給え。不名誉が私一人のものならば堪えます。只あなたの御名にかからぬようになさせ給え。多くの祈口をつきますが、今は心そのままを御前にささげ奉ります。クライスト御自分おとりなしの上おきき下さらん事を。アーメン。

西片町でお夕飯。夜おそくまで静かに歩いた。踏む可き道が明日になって来た。僕のためならず、彼女のため、神様のため、苦き盃を呑まねばならない。

帰るとおば様と嘉代ちゃんとからお手紙が来て居た。何が何やら判らなくなった。火曜日を待ちますというお返事を出した。

……〔講義要旨の英文省略〕……

１９１９年１１月１７日（月）

大変たまった日記を朝４時におきて書き出す。６時頃母様もおおきになり、僕の側におすわりになってお話が始まる。僕に家に不満があるのかと仰しゃるのである。順々にお話が進んで行く。いつもの通り母様は河の彼岸を歩いていらっしゃる。僕はあちら側にいる。一度この川を渡ったものは又これをもとの岸に渡り戻る事は出来ない。出来ることはお渡りなさいと手を出すばかりである。二年間手を出してお待ちした。空しい手を出す苦しさは出した人でなくては判らぬ。外の彼岸の人はそれには目もくれず、只彼方へ帰らぬを不満とせらるる。くりかえし言う僕が戻るは是絶対的不能である。一緒になりたいのです。どうぞ来て下さい。僕は手を出します。川を渡るのは母様御自身です。渡るには川の水量がましはせぬかと思われる程の罪に泣く涙がいります。苦が必要です。僕はそれを払って来ました。母様も即ちにお渡り下さい。見る目もつらくありますが、僕はつらさをこらえます。それが本当によろしいのです。何時かはそれのよろしいのがお解りでありましょう。

母様は嘉代ちゃんに帯どめをお祝にあげたいと仰しゃる。ご相談の上、おば様と僕とでえらぶ事にする。７時西大久保へ行き、お昼三越でお目にかかる。あれを悉くお目にかけた。是から母様が心配多くなられます。どうぞ慰めてあげて下さいましとお願したが、訳は通らなかったようである。おびどめより羽織の紐の美しきがあった。それに定める。

実さんを団さんに紹介。浅嘉町へフルンケル切りとお辞乞。項をたれて歩む毎にあるものが僕の胸をうって強くなれよといわれたおば様のお辞を繰り返して下さる。又一歩一歩を歩く毎にあるものが胸をうって、彼の如く人を愛せよと教えて下さる。有難き限りである。強くなさしめ給え。愛せしめ給え。安らかなる心を持って大きい仕事──人の目からは小さくも神様の目からは大きい御仕事をなさしめ給うを有難しと思う。

曙町をお別れに訪れて二人で心から祈る。

お美喜さんの優しいお祈を見た。彼はききあげ給うであろう。

母様は高島さんへ行って下さった。もっと早くお目にかかりたかったといわれる。何事も御心なる哉。

Resignation

 Longfellow

There is no flock, however watched and tended,
  But one dead lamb is there!
There is no fireside, howsoe'er defended,
  But has one vacant chair!

The air is full of farewells to the dying,
  And mournings for the dead;
The heart of Rachel, for her children crying,
  Will not be comforted!

Let us be patient!  These severe afflictions
  Not from the ground arise,
But oftentimes celestial benedictions
  Assume this dark disguise.

We see but dimly through the mists and vapors;
  Amid these earthly damps
What seem to us but sad, funereal tapers
  May be heaven's distant lamps.

There is no Death!  What seems so is transition;
  This life of mortal breath
Is but a suburb of the life elysian,
  Whose portal we call Death.

She is not dead,--the child of our affection,--
  But gone unto that school
Where she no longer needs our poor protection,
  And Christ himself doth rule.

In that great cloister's stillness and seclusion,
  By guardian angels led,
Safe from temptation, safe from sin's pollution,
  She lives, whom we call dead.

Day after day we think what she is doing
  In those bright realms of air;
Year after year, her tender steps pursuing,
  Behold her grown more fair.

Thus do we walk with her, and keep unbroken
  The bond which nature gives,
Thinking that our remembrance, though unspoken,
  May reach her where she lives.

Not as a child shall we again behold her;
  For when with raptures wild
In our embraces we again enfold her,
  She will not be a child;

But a fair maiden, in her Father's mansion,
  Clothed with celestial grace;
And beautiful with all the soul's expansion
  Shall we behold her face.

And though at times impetuous with emotion
  And anguish long suppressed,
The swelling heart heaves moaning like the ocean,
  That cannot be at rest,--

We will be patient, and assuage the feeling
  We may not wholly stay;
By silence sanctifying, not concealing,
  The grief that must have way.

佐伯さんの所にこの詩をおいて来た時に母様を訪問して下さいとも頼んだ。

１９１９年１１月１８日（火）

愈々渋谷へ最後に伺う可き──嘉代ちゃんの高島嘉代子さんとして僕に会える最後の日が来た。朝、日記を書いている。今日とる可き僕の態度について母様と御相談をした。御名を借りて悪事をする事なく、彼女のためといって僕のためにする事無く、最大胆に最細心に──しかも凡て僕の安心のために、母様に依って昨日の中渋谷の御様子を知りえたが故に、只彼女是を心から御心となしつつありや否やを僕の安心のためにききたい。若し万々一それが願いでなかったのなら、其の時にはもう今日と雖お考え尚ほしと願うと思う。但し事はおそらくは御意のままに円満に行く事と思う所以を申しあげる。鎌倉訪問については母様の深い深い御注意を伺った。尚西大久保に伺うようにとの事であった。

咽が痛む。昨夜やいて下さった時、硝酸銀が流れこんだ様に思えたが其の故かも知れない。痛む所は昨夜より奥の部位である。それに雨も非常に強い。尚更日記も貯って居る。という色々の訳で母様のお許を受けて休む事とする。

お昼少しすぎたら日記もすんだ。西大久保へ伺う。昨日のお礼を申上げる。羽織の紐が大変母様のお気に入ってよろしかったとお悦び下さった。おば様も僕の鎌倉行きについては反対であった。それは桑原さんの堪え得ない所であろうと言って下さる。おば様御自身、宣ちゃんとの事をお話し下さった。鎌倉行きは昨日までの僕の願であったけれども、母様おば様の御意見に僕は決心が出来た。

母様と僕との事に就いて色々お話をする。僕自身二年間一生懸命苦しんで来たのですから、今に至って母様が一足飛びに僕と一緒になりなさろうとお思いになっても、夫れは無理ですと申上げる。どうぞ苦しむ丈苦しんで下さる事をお願する外ありません。果で見る目もつらくありますが、止むを得ませんと申し上げる。３時お辞をして中渋谷へ伺う。おば様は鎌倉行き丈は是非会って僕にとめたいと思っていらした事で本当によかった。全くうれしいと仰しゃって下さった。

中渋谷へ伺う。嘉代ちゃんお暇乞に歩かれて未だ帰らず。僕の順序はおば様から嘉代ちゃんの心を伺うと思うのであったので、順序通りに行く事を願って居る中に、お客様が見えてしまう。四畳半に逃げ込んで、敦さん磯雄さん等とお話をして居る中に嘉代ちゃんが帰って来る。僕と二人きりになった。

順序の変更も何かの意味と思って、僕この間から伺いたくて伺い得ぬ事が一つあります。あなたの心の一番奥底にあるものでありますがどうぞお話しになって頂戴とお願をして、「こんどのお話是あなたのお願でしたか」と伺う。嘉代ちゃんが涙ながらに伝えて呉れた辞そのままを今ここに移し書く事はそれは出来ないけれども、罪の観念に強くせめられてどうしても云う事が出来なかった。是で戦って参ります。是が御心と思います。お免し遊ばして、と云われる。おば様のお心も同一ですかと伺う。そうだと伺って、僕にはさっぱり判らなくなる。果してそれが御心なのであろうか。僕から見て不合理的にしか見えぬこの行きさつが果して合理的なのであろうか。僕の観方の何所に欠け目があるのであろうか。早くそれが知りたい。

乍併、嘉代ちゃんの信仰は僕の信仰の親であらねばならない。僕も嘉代ちゃんと同じ運命を甘受し感謝せねばならない。

「それでは嘉代ちゃん、しっかりいらっしゃいましね。僕もしっかり参りましょう。おそらく僕は家を作る事なしに一生戦って参りましょう」

僕等のお互いの信頼と愛情と友情とは玆まで行かねばならないものであった。お祈を初めようとするとお客様がおかえりである。お膳が来た。おば様と三人で各々よき夕の御食事である事を特別に祈ってお箸をとる。ニコニコしながら頂いた。何も思わずに頂いたが、少ししか食べられなかったのが事変であった。お食事がすんで果物がすんでから僕から申上げる。──桑原から返事が参りましたし、もうそれで満足致す外ありませんから、荷物も鎌倉へ贈りました、と仰しゃったからであったかも知れない。僕の申上げる所誤って居りますかも知れませんが、どうぞお聞き下さいまし。僕には桑原さんのお返事は判りませんでした。こんなにこちらで心配していらっしゃる事をそれをおば様のお筆でお書きになったのに対してあれ丈のお返事しかお書きにならぬ方は──おば様は御本人を御承知ですし、僕はあれを通して推測するばかりですから判断の相異なるは寧ろ当然です──どうしても僕を御了解になる事は出来ません。万々一桑原さんが僕を御了解下さっても桑原さんのお母様が僕を御了解下さるという事は夢にも思えない事であります。其のために嘉代ちゃんの苦をよし第一信仰の事について桑原さんと嘉代ちゃんとの間に相異の点が顕われた時はそれは常に小池が嘉代ちゃんの後にいるからだという事になっては大変な重荷を加うる事になりますから、僕はお目にかからない方がよろしいと思います。お手紙も悉くおば様を通してに致しましょうと申し上げる。

おば様も夫れがよろしかろうと御同意下さった。そして早く僕自身が家を持って、桑原さんと直接のお友達になり、間接に嘉代ちゃんの重荷を助けるという人間らしい武田のおば様の方針を是となさった。僕は祈が更に力強きを知って居る。おば様も強くは仰しゃらなかった。

それから、僕おば様に先に伺おうと思って居りましたが順序が変って先に嘉代ちゃんに伺うようになってしまいました。どうぞおば様のお考をお聞かせになって下さいましとお願をする。

もう何にも申し上げる所はございません。おば様は涙ながらに仰しゃる。結納をすましますと急に嘉代の様子が変って参りました。若し不服なら、ままは何時でもやめて二、三年はゆっくりおうちに置きますから、心を開かしておくれと何度申したか判りませんが、何も彼もお祈り致して参りましたから、どうぞというこたえばかりでありました。先日あなたのお手紙を読みましてから、よく寝た夜とては一度もございませんでした。金曜の夜、あなたのお帰りになってから初めて心の中をすっかり話して呉れました。そうであったかと思いましたが、私は何も申さずに休みました。土曜の朝、又こんどは覚悟を申して呉れました。若し万々一不縁になっても二、三年は小池さんの所には参りませんと申しました。私は激くほめてやりました。もうもう何とも申上げる所はございません。

僕の口に辞はないかと云われた。頭を下げて申し上げる。僕も何にも申上げる事が出来ません。御辞有難く承りました。おば様をかくまでお苦しませ母とおばとを苦しめました事、是は僕が終生負うて参らねばならぬ罪であります。この一番僕にとってつらい五十日をかくまでも美しく暮らすを得させて下さいました事に対しましてはお礼の申上げようもございません。どうぞ、おば様、おば様が最後の息をおつきになります時に、僕が何所に居りますか存じませんが本当におば様のためにお礼の感謝を捧げて居りますのをお覚え下さいまし。少くとも一つのよき事本当によき事を地の上にてなしたという御確信をお持ちの事をお願致します。嘉代ちゃんにも心からお詫びをする。僕から何にもいう事が出来なくなった。帰ろうかと思ったけれども、あとで少し休んでお祈をしてとおば様とお約束をする。おば様は子供さん方の方へ行かれた。僕クロスを１２月のはじめは少し外さねばならぬ事など話しながら嘉代ちゃんとお別れに讃美歌を歌う。

１２５、２４１、３０９。〔註： 旧241番(現319)「わずらわしき世をしばしのがれ」、旧309番(現359)「夕日はかくれて道なお遠し」〕

おば様の御安心を願うお祈は後の事として、丁度９時になったので佐伯さんの病気おみきさん達のために祈る。嘉代ちゃんが祈り終るか終らぬにお客が見える。曰く、桑原さん。

大変な所に来合わせたと思う。暫くして僕一人の所におば様が入っていらしてお会い下さるかと仰しゃる。どちらでもと申上げた。桑原さんにお会いになりますかと聞いていらっしゃる。お目にかかりましょうと仰しゃる。お座敷へ出て行く。三十三と伺っていた。その割には若く見える方である。しかし何故か溌剌たる所が無い様な方である。子供らしい方である。僕程深い苦と悩とに会った事のない方のようである。深い所□まれた所のない単純な方である。是は僕の相手ではない。この人に対して戦を宣するのは惨刻すぎるという気が直覚的に起て来た。

２０分程お話をしてお祈の機会を失ったのを残念に思いつつお辞をする。どうぞよろしくという桑原さんの御挨拶があった。僕はもうお目にかからないつもりなので、是は全く思いがけない御挨拶であった。何とも申さず只頭をさげた。兵隊へ行きますまでにはもう一度伺いますと申上げる。どうぞとおば様もお待ち下さる由仰しゃって下さる。嘉代ちゃんには御機嫌ようと申して荷物を手から渡されて式台を下りる。もうあわれないかと思うとやや悲しい。そんな事をいう可き機会ではと強く思いかえし車に乗る。政美さんお静かにお暮らしなさいましと仰しゃる。おば様のお辞に心からお礼を申上げて、今夜からはよくお休みになる事をお願して、中渋谷を出る。

床についたのは１１時であった。

１９１９年１１月１９日（水）

４時少しすぎ起きて、昨晩三人で捧げ可かりしお祈を書き出す。

僕のためにという心少しも動かず、只嘉代ちゃんのためにと考えて祈ってここまで来り、何も彼にも殆ど不可動ときまって見ると今度は急に僕自身の事が回顧られた。９月以前に僕がなさねばならぬ事を僕はしなかった。９月２１日以前に僕がせねばならぬ事をなさなかった。９月２８日以前に僕がせねばならぬ事をなさなかった。昨日以前に僕がせねばならぬ事をなさなかった。凡て凡て動かぬ今となって尚漸く自分に帰って我の罪の重きをおそるると同時に我が悲の大なるに驚いた。現在が悲の絶頂ならば段々つきには細くなって行く事を想像し得るけれども、悲は他人には知られぬ悲は自ら自分にも判らなく刻一刻其の度を増して際限無からんとするを見て涙出でざるを得ないのである。

明日よりは未だ今日の方がという気が動く。母様に起きて頂く。どうしても僕と嘉代ちゃんとのこのなり行きに理解がつき兼ねる由を申上げる。母様は御本人の意思がきまった以上、如何とも致方がないと仰しゃる。しかし若しそれが見す見す死に行くものであったら、僕がとるとらぬと全然数年後の問題としておいた。もう一度おば様に考えて頂く可きではありますまいかと伺う。内村先生、藤井先生にという気が出ないのでもなかった。

どういう順序であったか判らなかったが其の時僕等二人が生きようとすれば多くの人が死なねばならぬという声が聞こえて来た。独身主義を抛棄した桑原さんも死ぬのであろう。不信者にして信者に申込みし罪であるかも知れないが、高島さんのおば様を殺す事は僕のなし得る所ではなかった。桑原さんのお母様も死なれるであろう。死に行く僕等は召されるままに死なねばならない。もう黙せん黙せん。嘉代ちゃんと僕と死にましょうと祈る。只もう二人を殺した以上、第三人目を殺す事丈は母様お許し下さいまし、とお願いする外なかった。

祈のこの部を書いて、静かに中渋谷へ行く。おば様にお手渡をする丈で、もう嘉代ちゃんにはお目にかからずに帰るつもりであったが、是非にといわるるままに上ってお茶を頂き、一寸御□代りをとらせて頂く。何か僕にお会いになって桑原さんは不愉快な御様子ではいらっしゃいませんでしたかと伺うと、嘉代ちゃんに政美さんというのは御名か御恬かと聞かれた由をお話し下さった。

よい天気である。うがいをさせて頂いた後、三人例のお座敷にひれ伏して祈る。おば様は例の聖書、僕等の祈の書いてある聖書をお持ちになった。──お別れの聖書とお祈とを捧げる。

　お父様、お父様、お父様とのみ御名をたたえて参りました。今日も亦お父様をあがめしめ給え。お父様に召されましたる事最私が致します故に私に第一のお祈をささげしめ給え。おそらく誤多き事でございましょう。どうぞあとより祈らるる嘉代ちゃんとおば様とのお祈りに正され、彼のお祈と合わせて御前に至らん事を願上奉ります。

　二年前ふと一冊の本によりヘルプレスになり、多のよきお友達の知らぬ中のお祈に助けられ、若しそういう事を許されますならば、彼の御恩恵に依り天地が変りましてから今日まで一日として御いつくしみの深きに泣かざる日とては御座いませんでしたけれども、この五十日程御胸のまざまざと顕われし日はございませんでした。一歩を歩く毎にあるものが胸をうって、政美強くなれと仰しゃって下さったおば様のお辞を繰り返して下さいます。一歩を歩まん毎にあるものが胸をうって人を愛せよと教えて下さいます。一歩を歩む毎にあるものが胸をうって神をおそれよと教えて下さいます。いつでも道は二つに別れます。その時常に僕はつらい道を歩かねばならぬをおぼえます。歩かねばならぬは御許へ来るにはここを歩けとさきに行きし多くの人がおしうるが故であります。あなたは尊き一人の先輩をつかい給うて、あなたを愛しあなたに召されしものには悉くの人に別なくも、病も悲も時には自己自らの罪と涙も悉くあなたへ一歩、僕等をひきよせ給う事を教え給いました。どうぞその御心のままに一歩近よせ給え。彼の歩まれしその時のつらき心と、人類を愛する深き心と、あなたを尊ぶ深き心とを持って、□いて彼の歩み給いしこの土地の上を御愛によりて召さるるまで歩み行かしめ給え。是僕に関する凡ての感謝と祈とであります。

　昨日、桑原さんに初めてお目にかかりました。お年は僕よりめしていらっしゃいますが、僕程の御苦労も無く今までいらした方のようにお見受致しました。乍併、お父様、若し御心ならば大いなる悲を歩んで彼を召し給え。本当に御心にかなえる一人の日本人あらしめ給え。彼に本当の信仰を与え給い、彼に本当のホームを与え給え。そのために若し僕の存在が邪魔になりますならば、どうぞ僕に特別なる御用を早くなさしめ給いて召し上げ給え。其のために嘉代ちゃんを遺憾なく使い給え。どうぞ犯せる大いなる罪にもまげて大いなる御仕事をなすを得しめ給え。何事も御心ままにまかせ奉ります。

　乍併、何事も桑原さんに授けつつも若し世間にあるある如くお嫁に貰ってしまえば信仰などはどうでもなるという様な者が少しでも嘉代ちゃんの周囲におこり、之を無視し是をしいたげんとする事がありましたならば、どうぞ其の時には猛然と世の中に反抗し大いなる力を以て是にうち克つを得しめ給え。何時までも何時までも、今日の清き心と強き信仰とを以て暮らし行くを得しめ給え。

　おば様、かくも美わしくこの五十日を暮らさしめ給いしを感謝し奉ります。ありのままを申上ぐれば僕の生まれましてより二十五年の間に最も美しい時でありました。夫をかくも美しく暮らさしめ給いし事に対しては何にもお礼の申上げようもございません。大きい苦しみでございましたが、御覧の通り強くなろう、しかし同時に人を愛しよう、彼をおそれざる切に彼のなし給えるあとを追わんと願って居ります。只今すっかり御安心下さいます事が出来ませずとも、少なくともいつかはすっかり御安心下さる緒となすとも只今のお祈の中にお求め下さればと祈ります。この事その失敗に帰せし時、彼をもうらむが故に罪になり易しとある人が教えました。其の意味に於て罪を犯さざりしを本当に幸に存じます。乍併、そのおば様をお苦しませまし、母とおばとを苦しませました点に於てのみは計らずして大きい大きい罪を犯してしまった事に気がつきます。是は一生負って行って、クライスト御自身にゆるして頂きます。悪い事を致しました。どうぞ正当の罰をお下し下さいましと願うは罪の罪たるを知らぬ人の言う事であると聞きました。今すっかりそれを思いがいたします。他の凡ての罪が許されるにしても、是にして許されなければ、僕彼に彼の前に立つ事は出来ません。どうぞお許し下さいまし。

　もう一つお願いしたき事がございます。それとお父様あなた御自身御存知でいらっしゃいますからやめます。感謝とお祈りと胸に満ちて居ります。口に上る事は是を以てやめと致しますとも悉くあなたは御存知でいらっしゃいますから是でもうやめます。

　どうぞ嘉代ちゃんとおば様とのお祈で僕の誤りの正されん事、やがて彼のおとりなしに依り自分にあらん事を許さしめ給え。涙は皆感謝の涙でございます。

祈り終ってホッとした。どうぞ神さまお父様、何時までもこの祈を心より絶えしめ給わざれ。

嘉代子さんお入り下さいとおば様が仰しゃる。嘉代ちゃん一生懸命祈って呉れる。

どうぞ、罪深き者をめぐみ給え。

どうぞ、強からしめ給え。

どうぞ、人を愛せしめ給え。

御心のままに御あとを追わせ給え。

考えの足らざりしを許し給え。

心の平和を与え給え。

雄々しくも最後まで戦い行くを得しめ給え。

僕のためにも雄々しかれと祈って下さった。胸のクロスが相応する如くであった。切なる祈りと、すくい主のめぐみ給わん事を声を合わせて願いまつる。

最後におば様がお祈り下さる。

何事もしろしめす愛するお父様。

何事も御心のままに運ばせ給うが故にもう何事も申上げず、御心のままになさしめ給えとねがい奉ります。

どうぞ、御両人の上に何事にも堪え得る強き力を与え給え。

どうぞ、終りの日まで強く強く御心のままに歩み行くを得しめ給え。

多くの祈と共にクリストの御名に於て願上奉ります。

おば様は僕に有難うございますと仰しゃって下さった。けれども、お礼を若し申上ぐるとすれば夫は僕の申上ぐ可き事で、かくの如きよき祈祷に接して心よりのお祈に接してお顔を仰ぐ事も出来なかった。

伺ってよかったと思う。うがいをさせて頂いてお茶を頂いて、どうぞ嘉代ちゃん御機嫌ようと申上げ、どうぞお身体をお大事にと深い御注意をうけ、お玄関に出る。どうぞ是非度々来てくださいよとおば様が仰しゃる。どうぞ伺わせて下さいましとお願いする。

本箱からCarlyle〔カーライル〕のOliver Cromwell’s Letters and Speeches〔オリバー・クロムウェルの手紙と演説〕を選び、おば様の御署名を願う。

嘉代ちゃんとおば様とは終点まで送って頂いた。本当に伺ってよかった。僕等が中央亭で会う事を神田川で会うと覚え違いをなさって、神田川へ僕等が行ったら電話でお祈の相談をしようといっていらした相である。本当に伺ってよかった。

沼津に行く事について若し佐伯さんと一緒になら非常に安心すると仰しゃった。僕も一人で行くかいといわれた母様のお辞を思い出した。頼んで見ようかという気になった。中央郵便局へ行って速達書留をおば様に書く。百八円の方はどうにか準備が出来ました。が沼津へ行く旅費が足りません。何彼と合わせて百円程頂きとう有ります。それから学校中ではありますが、どうぞ佐伯の行きます事をお許し下さいませんかとお願いする。そして佐伯は金のある筈はありませんから、合計百五十円程お貸し頂きとう存じます。御不本意を願って居るのかも知れませんが、どうぞ曲げてお許し下さいましとお願する。

昼、赤尾さんと石□とから僕の送別会話があったけれども断った。何とも致方なし。

夜、中央亭へ行く。十拳君に会った。愛す可き人よ、何となしに今夜は元気がなく見える。君お祈りしているのかいと聞いた。あとから君運動し給いねといった。馬鹿に大人げて僕を子供扱いにするねと十拳君は笑った。しかし、のんきにして居る可き時ではないと僕は思うからである。が藤と三人で何とはなしに夕食を一緒にした。ありのままをいって食事はうまかったがその他には何ものもなきテーブルであった。

８時、西片町へ電話をかけた。佐伯さんを呼び正門前で僕を待って貰う。グラウンドに出て今日あったままを話した。話半に９時が来る。おそらくは一緒に祈る事の出来る最後の９時と思って簡単ではあったが彼女のためを思う心配のお祈をした。話をすまして若しおば様がお許し下さったら、僕と一緒に旅行に行って呉れないかと頼む。それは承知したが、泣いて泣いて仕方がない。御心を知らしめ給え。それが凡ての祈であった。僕がそれ丈に堪えているのだぜ、泣かないで呉れ給えよ。漸く泣きやんだ。

西片町へ伺う。おじ様は御来客中であったのでおば様に丈お願する。おば様はよろしいと仰しゃる。白山下で別れた。

１９１９年１１月２０日（木）

今日が其の日である。お昼１２時半、１時丸の内の芝生に立って本当に祈る。深き御恩恵を与え給えと。

夜、西片町へ行く。おじ様の人間の憐れさにつくづく愛憎がつきたというのがありのままの事実である。大事な大事な事をかく見られて残念である。但し一人行く事はお許しになる。

夜、昨夜書かれた嘉代ちゃんの深いお祈が来る。しっかり歩いて下さい。

１９１９年１１月２１日（金）

高島さんのおば様に書く。

どうぞ、まま様とは申上げません。おば様と申上ぐる事をお許し下さいまし。又、嘉代ちゃんの事も聖なる聖なる御心よりお目にかかる事、口をきく事は出来なくとも、離れて祈る許されたる妹と思うをお許し下さい。僕に祈る可くあずけられた妹と思う丈はお許し下さいませんか。おば様にお目にかかる毎も嘉代ちゃんの嘉の字もいわないでいたり、涙ぐんでしまう事は僕の堪ゆる所ではございませんと申上げる。

浅野さん、寅井先生、齋藤さん、お暇乞。麻布最後。よき一年を願う。尾田さんにお礼。寒くなった。鳩山先生は廻るをよして帰る。

西片町では又僕をやるなと仰しゃる相である。僕、母様に申上げる。母様方は今どんな悪事をしようとしていらっしゃるのか御存知ないのですよ。人を愛せんとする僕の心に少しでも疑をおこさせたらそれでおしまいですよと申上げる。

１９１９年１１月２２日（土）

朝、又西片町へ行く。遺例なお話を繰り返しにである。母様とおば様との御相談の上でという事になる。僕は行くときめた。

お昼までに役所の用事すっかりすんだ。諸井も来て呉れた。最後の仕事はおば様にヘモグロビン薬のお礼を書くことであった。Good last workであった。十拳君に一寸会う。佐々木さんは足尾へ出張中。丸善と三越とで買物をして頭を刈って帰る。

夜、中名生さんへお礼。東中野ではEnoch〔エノク〕のお話。

……〔講義要旨の英文省略〕……

おば様が池におっこちになったと伺って驚く。まま様である。

佐伯さんから何も云わぬといって来る。

１９１９年１１月２３日（日）

荷物を作るに午前中かかってしまった。全くやっかいである。飯田町から先きに出して大手町へ行く。内村先生「十誡第十条」

……〔講義要旨の英文省略〕……

まま様、母様、敦さん、磯雄さんに送られてお祈をまま様にお願いして沼津に来た。

千本浜の仙松閣である。例の六畳の離れである。

〇帰る前の夜、帰る朝。

ここに来て随分多くの手紙を書いた。よき手紙が沢山ある。心の奥の奥までを書いた手紙はみんなまま様にさし上げた。何時か皆こうさせて頂くより致方がない。今それを片端から書こうというのは無理である。悉くを六本だか七本だかの手紙の中にこめてかく。

涙がつきず流れた六日であった。御心のままならしめ給えと祈りに祈った七日であった。星の黙示に驚きし七日であった。太陽もある事を語って呉れた。海も山もある事を語って呉れた。本当に朝も夜も昼も夕も祈った。歌った。一生忘れられないよきこの本当の意味に於て恵まれた七日であった。

苦しみの中によき主にある友人を一人ました。まま様がそれである。本当に有難かった。まま様なかりせば、佐伯との関係が今日の僕の心配するような事の起ころうとする時、如何にしてすごす事が出来たであろう。母もおばも頼りに足らざるを知りし時、本当に若しまま様微りせば如何にして心の底の底までを語る事が出来たであろうか。ふいてもふいても湧いて来る涙をどうする事が出来たであろうか。神さまは本当に僕を苦しめ給うた。しかしここに本当によきガイドを与え給うた。

どうしてこんなに僕を苦しめ給いしか。御心の深きを推し量る事は出来ないけれども、何か僕にさせ給う事丈は事実らしい。それを一生の頼みに僕は生きて行く。

智もすてた。

意もすてた。

もうすつ可きものはなく、残れるものは皆彼のものと思った。

その中にも聖なる聖なるものがあった。

此の世のものであるが彼のものと思っていた。彼はそれをも捨てよと要求し給いしがこの六十日であった。而してついに奪い去り給うた。流るる涙は其のためである。しかも、是を以て彼は僕を本当に生かしめ給うた。

彼と一緒になってもう世は惜しくない。世よ行く可き所へ行け。さよなら。

失いしと思いしもの悉くを悉くに更に加えたるものを彼は与え給うた。

僕自らも清まった。

嘉代ちゃんも清まった。

清められたる兄妹である。

天も祈れ

海も祈れ

山も祈れ

渕も祈れ

而して凡ては我がために心から祈って呉れた。

小鳥も祈って呉れた

波の音も祈って呉れた

日も祈って呉れた

星も祈って呉れた

祈って呉れないものは彼を知らぬ人のみである。

祈を体験しつつ、涙は、人の涙は

彼の涙に変ろうとする

苦しくも忍べよ

我又忍ぶ

といわれる。涙が悦となる

祝す可き一週間よ

汝は実に御恩恵そのものであった

示されたる道をいざ歩かん哉

凱旋はいわずと知れた事

今ぞ凱旋の序曲を奏せん哉

彼の御名を讃美し捧げん

１９１９年１１月２４日（月）～２８日（金）

〔記載なし〕

１９１９年１１月２９日（土）

帰京。藤井先生。西大久保、西片町。

１９１９年１１月３０日（日）

中渋谷。内村先生。東京駅。

悦につけ愁につけ神に御前にひれ伏す時

彼も彼所に御恩恵深く祈りつつ

大いなる日を待ち給えるを讃めさせ給え。

祈らんのみ

祈らんのみ

苦しみける本当に頭を悩ましける四十五日なりし哉

涙を流しける五日なりし哉

心より祈り祈りし十日なりし哉

祝す可き六十日よ

実に祝す可き六十日よ

過去二十五年の歴史に於て最めざましき彼の愛を示したるこの六十日にすぐる時にてはない。九月の末──十月の始にはじまりし六十日は今日十一月三十日を以て終らざるを得ない。

東京駅のお別れよ

本当に嘉代ちゃん

Christian dignity〔威厳〕とChristian humility〔謙遜〕との間を

強く立ち

人を愛し

御名をたたえて

歩いて下さい。

政美も同じ道を歩きます。

苦しい事は六十日でわかりました。

先き何十年が苦しい事か判りません。

しかし有難い事も六十日でわかりました。

先き何十年はどんなに悦の年月であろうか判りません。

悦は苦に勝ちました。

まま様のお祈

彼御自身のお祈

を忘れる事は出来ません

どうぞしっかり歩いて下さい

彼の御下まで歩いて下さい

政美も一生懸命御恩恵の下に

おみちびきの下に歩いて行きます。

ありがとう

ありがとう

本当にしっかり参りましょうよ

神様

あなたの御跡したわんとする二人と

そのために祈れるまま様とを恵み熱め給え　アーメン

踏みまよわんとする

僕の心に一番心配を与うる

佐伯さんを御恩恵給え

おみきさんを御恩恵給え

御名のままに歩き来りし彼等を

結局御名のまま歩きしめ給え

尊き御名に於て　　アーメン

粟屋を導き給え

彼の心にすきを起こさしめ給わざれ

歩む可き道を歩かしめ給え

大いなる子供を育て給え

主の御名に於て　　アーメン

武緒君をめぐみ給え

ここに健康を与え給い

ここに熱心なる友人を与え給え

彼よりやや感情的なる調子をとり去り給え

強き温き人たらしめ給え

御名によりて祈る　　アーメン

母のため

おばのため

弟妹のため

先生のため

友人のため

心より御恩恵と御導きの玆に

明確ならん事を願い奉ります

　　　　　　　　　　アーメン

よき六十日を終えて

よき一年を迎えしめ給え

赤坂にも　和田塚にも　中渋谷にも

戦ある毎に凱歌をあげしめ給え

只　主の御名のみあげしめ給え

人の名のあがる事なく

只御名のみあがらしめ給え

主よこの切なる尊き祈を助け給いて

父の上におそなえ下さいまし

　　　　　　　　　　　アーメン